



お砂糖をお使いになりますか

『柳宋悦 茶道論集』（岩波文庫、1987）の「茶道を想う」に次のような一節がある。

「彼らは見たのである。何事よりもまず見たのである。見得たのである。凡ての不思議はこの泉から湧き出る。

誰だとして物を見てはいる。だが凡その者は同じようには見ない。それ故同じ物を見ていない。ここで見方に深きものと浅きものとが生れ、見られる物も正しきものと誤れるものとに分かれる。見ても見誤れば見ないに等しい。誰も物を見るとはいう。だが真に物を見得る者がどれだけあろうか。」

なかなか含蓄に富む一節である…が、実は私が『柳宋悦…』を読んだのではなく、多和田葉子さんが『言葉と歩く日記』（岩波新書、2013）の中で紹介しているものの孫引きである。多和田さんは1960年生まれ、都立立川高校出身で、現在ベルリン在住の作家。ドイツ語でも日本語でも作品を発表しており、言語に関するエッセイも面白い。私はドイツ語を知らないので今一つおもしろさを味わい切れていない気がするが、外国語系への進学を考えている人は読んでみるとよいだろう。

では、ついでにもう一カ所引用。

＊

フランクフルトで東京行きの便に乗りかえると、日本人がたくさん乗っていて、なんだか半分、日本に着いたような気分になった。隣の人が飲み物を訊かれて「オレンジジュースで」と答え、日本人のスチュワーデスが「オレンジジュースで」と繰り返して確認した。この「で」の使い方は三十年前にはなかった。他にも比較的新しい言い方に、何も飲まない

時の「だいじょうぶです」がある。ドリンクがなくても死なないから心配しなくても大丈夫という意味なのだろうが大げさだという気分が今でもする。「お砂糖をお使いになりますか」という表現にも慣れることができない。砂糖は道具でも召使いでもない。コーヒーの中に入れる以外には使い道がないのに、わざわざ「使う」と言って、他の使い方のある可能性を確保しているところがおかしい。コーヒーに入れる以外にどんな使い方があるのか考え始めると、変に空想力を刺激されてしまう。（中略）

ドイツ語なら単刀直入に「Mochten Sie Zucker?（砂糖が欲しいですか?）」と訊くが、日本語では相手は何かを「欲しい」かどうかを敬語で訊くのが大変困難で、「欲しい」ということ自体、それが自分のことであれ、相手のことであれ、なまなましすぎる。敬語は、自分や相手が何かを欲望していることをなるべく間接的に言おうとする。でも、人間は自分が何かを欲しい時、また、相手は何が欲しいのか知りたい時に口を開くことが多い。この矛盾をどう解決するのか。

＊

なかなか面白い指摘である。確かに、敬語で欲望に関する表現をするのは難しい。ちなみに、上の例で私が思いつくのは「お砂糖はお入り用ですか?」といった言い方である。

この後、『枕草子』の「春はあけぼの」を例に、現代の学生がこのようには言い切らず（決めつけず）、「相手を傷つけないように注意を払い」ながら会話することを指摘する。『枕草子』が登場するところが面白い。